深志高校新聞

第138号

秋田先生を訪ねて

本校においでになったころ、クロのめんどうをよくみ、可愛がっておられたという秋田先生を訪ねて、クロが本校に住みつくようになったころの話を中心に、クロにまつわる様々な話をうかがってみた。先生は、

「あれは確か、僕が一年の担任をもったときだから——新聞は三十五年って書いてあったがね——三十六年のとんぼ祭のときだったなあ。……」

こういって、先生は話し始められた。（以下は、先生の話を新聞委員会でまとめたものである。）

当時先生は一年生の担任でおられたそうだ。その頃のとんぼ祭には仮装行列という行事があり、先生のクラスでもその出品作を考えていた。仮装行列というと、仮装してあちこち歩き回るというのがオーソドックスな形だが、それではおもしろくない、ということでひとつ世界の有名人を集め、動かない——銅像のような——ものをやろうということに決定した。そしてメンデル、リンカーンなどの各国の代表が選ばれ日本からは西郷隆盛がピックアップされた。そこで問題となったのが西郷さんにつきものの犬である。そんなときちょうど当時体育館の横にあった部室（現在の柔道場のあたり）をウロついていた犬を、先生のクラスの矢島さんという我々の先輩がスカウト。その矢島さんが西郷さんとなり、仮装行列に参加、みごと一等を獲得した。これが、クロの深志高校でのデビューであったクロはこの頃すでに成犬となっていたそうで、仮装行列中にちょこちょこ動いてしまうだろうとか、にげ出してしまうだろうという不安をよそに、名犬ぶりを発揮し、以後〝深志高校のクロ〟として可愛いがられることとなった。

そののち、先生は非常にクロを可愛いがり、またクロも先生によく慣ついていた。先生は昭和三十九年、本校を去られたが、その三年間はやはり先生のおられる生物研究室へ来ることが最も多かったそうで昼になると自分で戸をあけ昼食を待つクロであったそうだ。又、生徒もよくクロを可愛いがって、めんどうをみていたそうである。

我々の知っているクロとは違いまだはつらつとした元気な犬であったクロ。しかしその性格は今と変わらず、おとなしく、かしこい犬であった。そして非常にネズミをとるのがうまかったそうだ。クロがネズミとりの名人とは、我々の知らなかったクロの一面である。宿直の先生といっしょに校内をみまわるというのは、クロの語り草となってしまったが、ほんとにいっしょに回るというよりは、先頭に立って見回りをしたそうである。公仕室の横でねそべっていて、カギの音がガチャガチャ聞こえてくると、起き上がり、特に新任の先生などの先頭にたち、案内係の役を果たした。そして、見回りが終わるとホッとしたように眠り、さながら見回りが自分の任務であるかのようだったという。一方先生方の方も、クロがいっしょにいるということで非常に心強く、たよりになったそうである。このあたり、〝深志犬クロ〟の所以を物語っているようだ。三十八年、先生が本郷村に引っ越したときも、ちゃんとついてゆき、ひとりで帰ってきたそうである。

さらにクロの職員会出席というのも有名だが、どうもこれは、食物目あてのようだ。クロは、たいへんな甘党で、職員会などでも先生方におかしなどのさいそくをし余りものがでると、それをもってゆき一人でゆっくりと食べる。ということが好きだったらしい。しかし翌日には腹をこわすということがたびたびあったそうだ。

クロはメスであるから、子どもを数多く産んだが、必ずしもクロのような〝名犬〟ではなかったそうだ。先生のところでも、クロ二世を飼っておられる。これは、四十年七月に生まれた子だそうだ、四四生まれた子のうち、最も元気がよかった白い犬を、公仕さんが持って行ったそうだ。ちょうど八月十五日だったので、〝ピース〟と名づけ、以後七年、現在も元気である。先生は「今、ちょっと病気をしているんだが、この犬もりこうな犬でね。」と言いながら、我我に、ピースを見せて下さった。我々の知るクロ——あのぼてっとした体——とは結びつかなかったが、クロがとびはねていたころはあんなに元気な犬だったのかな。

いずれにしても、当時は非常に元気であったクロだが、やはり年令的にも、おしよせる年波による衰弱には勝てずついに死んでしまった。このことについて先生にうかがってみると、

「まあ、交通事故などという形じゃなくて、純ぜんたる長生きをして、年令的にも十八年ということで、しょうがないんじゃないかな。十年も先生や生徒の手で可愛いがられたんだから、犬としては幸わせな一生を送ったんじゃないかなあ。」

と語っておられた。

（秋田正人先生　S23～S39　本校生物科職員）

クロと私

竹内延一

クロと親しむようになったのはいつ頃であったかはっきり覚えていない。校内の部室から愛情の糸をたどって、一、二棟の間の中庭に現われ、公仕さん達にかわいがられ始めた後しばらくたった頃であったろうか。

私は幼い頃家で飼われていた犬をきょうだいのようにして育てたが、その時に胸にしみこんだ犬に対するなつかしさがめざめてきたのか、いつの間にかクロに親しむようになり、家の料理の残りなど持ってきて中庭の木の下で与えることになった。

一日が始まると校内には活気が溢れ、職員、生徒はその日の活動に突入して行く。そのような時に一時とは言え、いい齢をして犬と遊んでいる自分の姿に後ろめたい気持をもちながら、中庭の木立の下で、与えたものをたべるクロの姿を見て満足していた。

そのうちに、公仕さんたちの暖かい気持から公仕室の一隅に住居を恵まれたクロはパトロンの範囲をひろげて行き、公仕室から事務室それから職員室へと人なみの出入りをゆるされるようになり、遂に一時は校長室のソファの上に姿を現わすまでに愛されるようになった。次に先生方や公仕さんの中には私などの手の及ばぬような上等の食物を持参して与えてくださる人々がでてき、生徒はコンパの時にできたてのごちそうをわけ与えるようになって、クロはこの暖かい学園に安住の地を見出したのである。

私は平素はバイクを使って通勤していたが、ある日曜日のこと、所用で歩いて登校しその時は平素使っていない帽子をかぶり運動靴をはいてきたところ、クロの目にはそれがハイキング姿として映り自分の先祖が徘徊した山野への憧れにさそわれたものと見え、帰りがけに後をついてきて追いかえしても仲々あきらめない。私は、次の日の仕事の関係上その日は家へつれて行くことができず東門のところで叱るようにして帰したが、その時の淋しそうなまなざしが忘れられず、その後一度わが家へつれてきたことがあった。学校を出て神沢の田圃の中の細道を通って島田の家まで来たが、この散歩はクロにとってはうれしいものであったようである。家の者は、私の親友として平素から耳にしているクロの来訪とて大歓迎をして、記念写真をとって一泊してもらったが、この客人が極めてひかえめで行儀のよいのに一同感心した。次の日登校の時学校までつれもどったが、家を出て交通上危険のない田圃の地帯へ入ってから、自由に先に立って歩かせたところ、時々地面を嗅ぐようにして、前日たどった細道をさぐりあてて学校へ帰り、犬のもつ「帰巣本能」をみごとに証明してみせた。

毎朝登校して公仕室に入ると、私の視線は自然と右下方に向い、クロの姿を求めるようになったがその時間にはクロはもうそこには居らず、雨天でなければ、明るい前庭をバックに玄関のアーチの下にクロのシルエットが見える。それを見て私は何かしら安心した気持になったものである。

クロは学校の構内に居るかぎりは、鎖につながれる必要はなく、この広い校舎、校庭、草地の上、木立の下を自由にあるくことができどこへ行っても愛の眼を注がれた。このような自由を与えられた犬は現在は多くはないだろうそれというのもクロがいたずらにさわがず、何の害もしないことによるものであったろうが。

一応、私もクロをかわいがった人の一人となっているが、クロをかわいがったのは自分のためであったろう。クロは私にとって慰め激励の存在であった。「わが子のように愛する」という言葉があるが、私は自分の子供を愛するのとは異質なものを感じないわけには行かなかった。頭を一度なでてやっても、言葉が通じないだけにかえって人間には存在しない心がかえってくるように思われる。それは「われときて遊べや」の心境に通ずるものであった。

SBCによるクロを中心としたテレビ放映は長い松中深志の歴史の中で異色のできごとであったがクロが居なかったとしたら、私も一生涯のうちにテレビに出ることはできなかったろう。わき役としてすこし顔を出すことになって自分の姿を画面に見ることができたのもクロのおかげである。あの放映の最後のシーン、広い運動場から校舎の中へ消えて行くクロの姿は、クロのすべてを語っているように思われる。

深志高校退職にあたり、離任式のあと、生徒諸君から贈られたクロの等身大のぬいぐるみは、つやのよい毛なみに青色の首輪をつけて元気であった頃のままの姿で私の側に坐っている。

（竹内延一先生　S28～S46　本校英語科職員）

クロ公エレジー

3年　北　星夫

死んじまったものは、もう帰ってきやしない。

死んじまったものは、もうおしまい。

クロがとうとう死んだよ。あいつ変な病気にかかりやがってさ、もう百才越えてるんだって。大往生だよな。

長い間、恐しいガキどもの出入りするこの学校で、よく淡々と生きてきたもんだ。

名犬ラッシーなんてのと違ってさ、ボテッと太ってゆったりしてやがるくせに、おじさん達の見回りなんぞには、けっこう一人前の顔をして、ひと役もふた役もかってたそうだ。あいつが暗闇からヌッと現われたら、ドロボーだってガクッとくるよな。

三年前には、まだ元気でさ、授業なんかも見に来ていたよ。チクって言うのか、あのセンセ、あれといっしょにやって来て、所構わず寝そべってやがるんだ。

ちょっと居眠りして、ねぼけまなこで床見たら、あいつがキョトンとした顔で、こっち見てるだろ、あわてて教科書開いたよ。

さすがに今年は調子悪そうだった。寝てる所へ行って、ヤアなんて言ってもムッとしてるし、歩くなんて至難の技みたいだった。

夏には本当にあせったよ。死にそうだって言うじゃんか。あいつの顔見て、こりゃダメかなって思ったよ。あの時、募金があってさ、ほら、クロを救おうとかいうヤツがさ、あれでたくさん集まったんだって聞いて、この学校のヤツラもまだ捨てたもんじゃないなと思ったよ。

薬やら、みんなの気持ちやらが、どう作用したのか、あいつ夏を乗り切りやがった。最後の力だったんだろうなあ。

あの日、朝来てみたら、あいつ毛布にくるまって寝てやがった。目を閉じてじっとしてる。動かない。

おじさん、って言ったら、「だめだったよ。」ってひとこと。

そうか、死んじまったのかって、やけに素直に納得できたよ。

おじさん、つらそうだったなあ。忙しそうに動いていたけど、顔がキットなってさ、まるで、自分の子供でもなくしたみたいだった。

線香があたりを包んで、生徒が次々にやってきた。あいつ、箱の中で毛布にくるまって、皆の顔をひとりひとり見てたかもしれん。

午後四時過ぎ、人垣の間をぬって、あいつを乗せた車が行っちまった。解剖だってさ。仕方ないね それも。

たしかにあいつは、ただの犬だったさ。だけど友達だったよな。

別にあれこれ可愛がったわけじゃない。ただ通りすがりにあいつの頭をちょっとなでていく位さ。

あいつ、それでけっこう喜んでいたし、オレ達だって、なんとなくホットした様な気分になったもんだな。

あばよ、クロ。あの世で、又のっそりのっそりとくらしていけよ。

死んじまったら、おしまいだけど、ただそれだけでもないかもしれんな。

亡きクロを偲びて

国見金熊

クロ十八、公仕室の畳の上に
　毛布かけられて死にて居たりき。
ストーブ燃えさかる中に毛布きて
　クロ十八年の命終えしか
四つの肢わづかに曲げてよこたはる
　クロは眼を少しあけをり
巡回に立つ公仕さんの後追はんと
　腰なえしクロはひたもがきしとふ。
全身は余すくまなく黒かりしが
　口端のみは白髪なりしよ。
「お座り」と「お預け」の芸を教えしを
　只の一度にて覚えたりしクロ
こんなにもわかるものかと驚きぬ
　内と外との人の区別が
大儀そうに臥てばっかり居しクロも
　外来者と見れば激しく吠えぬ
昨日（きぞ）の夜の寒さは、老いのクロの身に
　耐え難かりしか今朝も雪まふ
玄関のクロの姿失せてその跡に
　ぽっかりと大いなる穴あきし如
先生にも生徒にも、なべて可愛がられ
　クロ十八年をよくぞ生きたれ。

（国見金熊先生　S23～S38　本校独語科、英語科職員）

死因〝老衰と悪性腫瘍〟

獣医土屋先生に聞く

致命的なものとなったのは悪性腫瘍が肝臓に至ったことだろうと獣医の土屋先生は言われた。土屋先生はクロの病気のことを誰よりもよく知っておられる。クロのかかりつけの先生である。先生は、クロの肝臓標本を見せて説明してくださった。

クロは今年五月に大病をした。それは子宮蓄膿症といって、子宮に膿のたまる病気である。六月の十二日頃から悪くなり、十五日に診察したところは、腰が立たず、食欲もなかった。そして四〇度くらいの熱が数日間続いた。しかし六月二十八日頃から食欲も出て七月二十日頃には元気になった。だめかと思ったほどで、本当によく助かった。しかしその時にはすでに体のいたる所に腫瘍があった。この腫瘍は一昨年ごろからでき始め次々と各臓器へ転移した。脾臓、腎臓、肺……そして、致命的となったのは肝臓への転移だった。肝臓は働きを全く失っていた。クロは結局、老衰にこの悪性腫瘍が伴って死んだのだ。しかし、クロは犬にしてはずいぶん長生きした。昭和三十六年に深志に住みついた時にはすでに成犬になっていた。それから十余年もの月日が流れたのだ。クロの年齢は十八歳と推定される。犬の平均寿命は七歳前後早い犬は三歳から四歳で死んでしまう。十歳まで生きれば長生きしたと言える。十歳以上生きる犬は三割程度にすぎない。三歳から四歳で死ぬ犬の七割は、ヒラリアという伝染病で、心臓に針金のような虫が住みつき、これが血管につまってしまう。このように体内に虫が寄生することによって死ぬ犬は多い。しかしクロは、虫を全く持っていなかった。クロのような病気は珍しく、学会でもほとんど研究発表がない。犬や猫の小動物の小ガンの発表はよくあるが、クロのような全身ガンはない。クロの場合は一種類の腫瘍ではなく、少なくとも三種類、何種類もの腫瘍である。

クロを初めて診察したのは一昨年の春で、クロが流産して衰弱した時である。これ以前は恐らく病気はしなかっただろう。このころから流産をして、子を生まなくなった。血液検査、レントゲン等検査したが、そのころは元気であった。そして今年六月の大病。九月に腱鞘炎。この時は爪が長すぎたためにつまずいてびっこをひくはめになってのだろう。そして十一月二十八日ごろに腰がたたなくなり、三十日の朝眠るように死んだクロの病気といえばそのくらいで病気はしない方であった。これは栄養が良かったためだろう。心臓がたいへんじょうぶで、消化器系の臓器も全く異常がなかった。これが長生きした直接の原因であろう。

クロの死はもうやむを得ないことであると土屋先生は言われる。クロの狂犬病予防接種は、第一回めから最終回まで土屋先生がされた。健康だった時はどうしても注射をしたがらなくて、公仕さんがロープをかけて連れてきても逃げてしまったそうだ。そしてクロに縄をかけておさえて注射をしたという。去年あたりからわかったのかおとなしくなった。六月に大病をわずらった時には、土屋先生がいくと、注射をしてもらうんだという様子で手（前足）を出したそうだ。そして十一月、死期も近づいて全く元気を失ったクロは、顔をあげ、診てもらう顔をした。クロは人を識別して記憶する能力にたいへんすぐれていた。そう、先生は言われた。これは公仕さんも感心して言われたことである。

とにかくクロは長生きした。十八歳ともなると、普通は老衰と見て飼い主もあきらめてしまうので先生はあまりクロのような例に会ったことがないと言われた。先生は、クロの病気を研究し、近辺の研究発表において発表したいとおっしゃった。

特別寄稿

出会い

クロは昭和三十六年（今から十一年前）の秋、トンボ祭の一環として行われた運動会の「仮装行列」に初めて登場し、全校友の圧倒的支持を獲ち得た。クロがかもし出す侵し難い精神的雰囲気と物おじしない態度、更には秋の日射しとしては強過ぎると思われるほどの陽光に全身を覆う彼女の漆黒の体毛は美しく照り輝き、そのデビュー振りは、大国の新大統領ですら顔負けするほどの華々しさであった。

深志の新国籍を取得した我等がクロは以後、幾多の人々にそれぞれの感銘、感慨を懐かせることとなるのだが、その前に多少のプロローグを述べることが必要であろう。

クロと僕等との出会いを語るには、運動会から更に十日程前の夕刻にまで遡らなくてはならない。

当時、一年五組の生徒は五組の名誉をかけて「仮装行列」参加の出しものを大わらわで作成中であった。クラス討論を何度か持ち漸く「世界の銅像巡り」と題して出場することを決めたものの、作業は計画とは全くかけ離れた段階を大声とさも忙しそうな動作に反比例してゆっくりと歩んでいた。

その一つに、日本の銅像を代表するものとして出品を予定されていた「西郷隆盛とその犬」というのがあった。ところがその作品、時に「犬」についてはタイムリミットが目前に迫っているというのに、全く方策を欠いていた。そこへ一匹の黒犬が忽然と我々の前に姿を現わしたのだ。クロは一歩一歩夕暮れ迫る体育館の前庭を歩んできて、我々の前に立ち止まり、我々の顔を興味深そうに観察し、何かを得心したかのように首を振り、我々の許を容易に離れようとしなかった。クロの風体といえば全身が真黒であるということの他は、平凡な犬ととりたてて異るところはなかったが、彼女の動きはひとつひとつ意味ありげで、何やら思索に耽っているように思えた僕はそれ以後クロを内心で「哲人」と呼ぶことにした。この黒い犬と西郷ドンの犬とを結びつけるのに——この黒犬に愚鈍さ・頼りなさが欠けていることさえ除けば——大した時間を、我々は必要とはしなかった。

青年の怠惰と冒険心は、往々にして困難を容易に取り除く。

「こりゃあ、野良かえ?」と、一人が素頓狂な声をあげる。「ウーム、野良にしちゃあ体はええれえ汚れてねえみてえじゃねえか。」一言居士達の発言で体育館の前がひとまわり賑わった後で、おもむろに発言した男がいる。「野良犬である。何故かなれば、見よ！しかるべきところに首輪がないではないか。」大騒動も遂に終焉を迎えた。

我々は、いたく感心し、首を振って賛意を表した。それはまた、その野良犬の所有者が、たとえ後でのこのこ名乗り出てきたとしても、我々の許から離しはしないとの黙契を互いの心の裡で確認し合っていることを固く結んだ口元が示していた。

それから我々飼い主と飼い犬クロとの共同生活が始まるのだが、主従の関係が除々に消え去っていくことに、我々は気付かなかった。

それと引きかえに、クロが除々に我々の精神領域に入りこみ、その地位は、従たるものから対等なものへ、その像は小さなものからだんだんに大きなものとなっていった。クロの澄んだ瞳と我々の心との間に、もはや何の障碍もなかった。

我々のみならず、他のクラスの人々も、朝、昼、夕食をクロのも[illegible]

僕等の出番の間近いことを知らせていた。うろたえきった僕はクロに頬ずりしながら夢中になって語りかけたものだ。「クロよ、おめえはへえ、野良犬じゃあねえだぞ。俺っちのクラスの一人だぞ。俺達の前に出ていった奴はリンカーンを慕う奴隷の役で真裸で、着物の代りに墨を塗りたくって出ていったし、布切れ一枚で頑張っているガンジーだっている。ジャンヌダルクだってゲーテとシラーだって、トルストイだって、ウイリアムテルだって、メンデルだって、そりゃあ苦労して作りあげただぞリヤカーを引くしょうだって一生懸命だぞ。クラス中の努力が今動いているだぞこの努力が報われるかどうかは全てクロ、お前にかかっているだぞ。いいかクロ、せめてグランド一周を終るまでは、じっと辛抱していてくいやな。これが終ったらお前の好きな牛乳をたらふく飲ませてくれるでな。」

こんな言葉を呟きながらも僕はこんな言葉の効果など信じていなかった。いくらクロがりこうでも言葉が犬に伝わるわけがない。た[illegible]

の度を加え、花道から声までかかってきた。

「あれ?クロよ!お前は!」そうだ奇蹟でも何でもない。クロの平生の姿に戻っただけだったのだ拍手は増々強くなり、その音と称賛の声は嵐のようにクロを包んだが、クロは相変わらず唯我独尊といった風体で、泰然自若として自分の世界に浸っていた。

僕は事の以外な成行きに胸が一杯となり思わず空を見上げた。

全校の職員・生徒の心を一つにした拍手に包まれて見上げた空はどこまでも、どこまでも、青く澄んでいた。

追記

我々五組がクロの名優ぶりに導かれて一等の栄誉をうけたことは申すまでもありません。「世界の銅像めぐり」のヒーローであったクロは、既に全校友の拍手喝采を受けた時から、我々五組の仲間の世界から離れていってしまったのです。

そしてクロの本処は、剣道場から生物研究室の秋田先生のもとに移されました。「世界の銅像巡り」のヒントを与えてくれたのが、万年青年の我等が兄貴であり先輩であり担任であった秋田先生であり、博愛主義者でもあった秋田さんは、そんなよしみもあってかクロを実の子供の如く可愛がり、弁当を与え鑑札をつけ「クロ」という彼にとって過不足なき名称を与えたのです。

クロは深志職員の一員として確たる一歩を踏み出しました。

幸福の道を歩み初めたクロが、彼の心底信頼する秋田先生の後を追い授業を聴講するようになっていったのも自然のなりゆきでありそれは又、それから間もなくの事だったのです。

そのクロも遂に悪性腫瘍と老衰の為に亡くなったとの訃報をいただきました。

青春の道標としての「クロ」がこの世にいなくなったことに深い悲しみを感じ、クロの冥福を心から祈らずにはおられません。

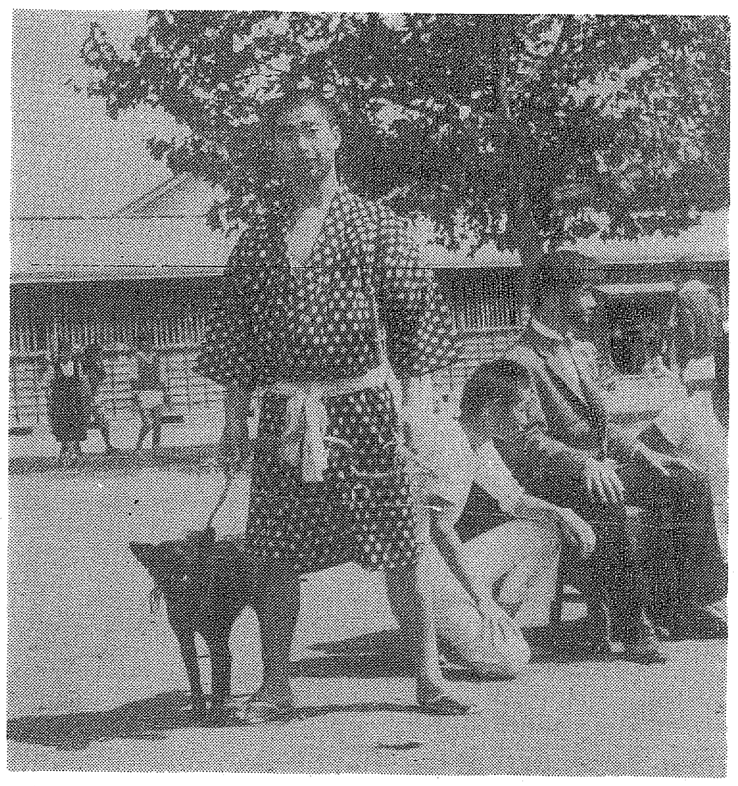
しかし、それと同時に、クロと生活を共にした諸先生方、多くの学友、公仕さん等、諸々の人々の[illegible]

× × ×

この寄稿は、昭和三十八年卒業生の一先輩にお願いしたものであります。[illegible]

尚、原稿及び写真など協力していただいた方に深く感謝いたします。

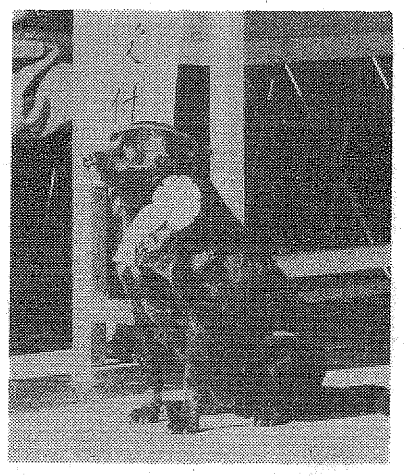
在りし日のクロ



昭和三十六年とんぼ祭、西郷さんの犬として登場。

◀クロはこんなにスマートだった。

▶クローズアップ



▼昭和42年。90周年記念祭のとき，玄関で来賓を迎えるクロ。